

第七部会

親鸞の回向思想について

中山 彰 信

『浄土とは何か』という問題の中から、還相回向とは如何にとらえるべきか。その中でも還相の主体である菩薩は「他者（如来）」・「自己（往生人・衆生）」どちらのことと考えて還相の菩薩が考えられているかを考慮するものである。

そこで親鸞は「教巻」の冒頭に「謹按浄土真宗、有二種回向。一者往相、二者還相。」と、二種回向を示され『教行信証』の根本的本質が二種回向にあることを示している。又「正像末和讃」に「南無阿弥陀仏の 回向の恩徳広大不思議にて 往相回向の利益には 還相回向に回入せり」と、名号の功德によって浄土に往生し、仏果を証したことの利益として、還相の菩薩となり娑婆世界で救済活動をするのであると。「行巻」にも「破無明闇、速到無量光明土、証大般涅槃、遵普賢之徳也。」と、如来の大悲によって浄土に生まれたあと普賢の徳によって衆生の摂化活動をすることを明かしている。ここには衆生が大悲の回向によって往生後に還相のはたらきをすることが示されていると考える。そこで、還相回向について親鸞は、「証巻」の還相回向釈に「言還相回向者、則是利他教化地益也。」と、還相回向は衆生を摂化するためのはたらきであることを最初に

明す。それは『浄土文類聚鈔』にも「大涅槃、則是利他教化地果。」と示され、大涅槃の証果が自利利他円満の世界で利他教化地の果としてはたらくことを親鸞は示している。その根源が『大経』の第二十二願である。この願は還相の菩薩の大慈悲のはたらきを誓われたもので従果降因の還相の菩薩の摂化活動の成立の根拠といえる。『浄土和讃』には「安樂無量の大菩薩 一生補処にいたるなり 普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず 化するなれ」と生死の迷いの世界から浄土往生したものは菩薩となつて還相摂化のために穢国へ化身として活動するのである。第二十二願の意を根拠として『浄土論』『浄土論註』の意をとらえられたと考える。その中還相回向は浄土の従果降因の菩薩のはたらきの行であり、その行「奢摩他・毘婆舍那の止観行」を浄土で成就し、平等法身と超証した菩薩として還相摂化のはたらきに出ることがあかされている。莊嚴三蔵二十九種は一法句の真如を根源として成立しているものである。仏莊嚴において阿弥陀如来は浄土の座主として、浄土の根源が衆生救済の為の自利利他の功德をはなたれていることを明す。又、菩薩四種莊嚴を示され、真如の体は「如」で、菩薩はとらわれを離れた行（四種正修行功德）を示し、還相の菩薩のはたらきの具体的内容を示される。浄土から出た菩薩は如来へ昇進していく徳をうけ衆生を還相摂化していくのであると考える。このことは本願力による往相回向によって衆生が往生し、浄土へ生まれたと還相の菩薩となつて利他教化地の益とおさめることを示す。これは阿弥陀如来が循環的な往相回向をくり返すはたらきとは考えられない。又、善巧摂化章で「かくのごときの菩薩は

奢摩他・毘婆舍那広略修行成就して柔軟心なり」と示し、還相の菩薩に対し、何か不可思議な力によって、菩薩の還相のはたらきがそなえられていることの意と考える。親鸞は最後の利行満足章において、還相の菩薩が阿弥陀如来の本願力により、五果門の功德を満足されたと、又、「入出の次第の相を示現せしむ。」と読みかえられていることは、還相の菩薩のはたらきが、本願他力・浄土の徳によるものであると捉えていた面は強いと考えた。還相の主体である菩薩について考察してみると、親鸞は利行満足章の文を解せば、全体が阿弥陀如来の本願力回向におさまると考えられるが、和讃・和語集等の文を考えると、還相の菩薩が浄土往生し、浄土から菩薩となって摂化活動に出ると考える。しかし、菩薩の摂化活動のはたらきの全体に阿弥陀如来の本願力回向のはたらきが浄土の根源からはたらいっていると考えられた。

親鸞の念仏の内的構造

加藤 智 見

「念仏」は、仏教史上さまざまな意味をもち展開してきたが、今回は「南無阿弥陀仏」と称える意味での念仏の、特に親鸞における念仏の内的構造の特色を、彼における「南無」の把握の仕方を中心に検討してみたい。

親鸞は「南無」を「帰命」ととらえ、一面で「『帰命』は本願招喚の勅命なり」(『教行信証』)と把握する。すなわち「阿

弥陀仏に南無せよ」と仏自らが衆生に向かって強く呼びかけ、働きかけるものとして帰命を把握し、念仏をそう受けとっている面がある。

と同時に、たとえば「『言南無者』というのは、すなわち帰命ともうすみことばなり。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり」(『尊号真像銘文』)と把握する側面がある。すなわち勅命に従って招喚に応答しなければならぬと把握する側面があるのである。

この二面があるということは、「阿弥陀仏に南無しなさい」という呼びかけと「阿弥陀仏に南無します」という両面がすでに念仏の中にこめられ、念仏自体がすでに仏のほうから用意されていたのだと親鸞が気づいていることでもある。これは、從來念仏が三念や六念の一つ、観像・観想の念仏、五念門の一つとして主として衆生のなすべき行為として考えられてきたのに対し、親鸞が執拗に釈迦・弥陀の仏意の中に念仏の意味を聞き取ろうとしていることを表わす。であれば、念仏の主体は衆生であると同時に仏でもあり、このことを可能にするのは仏意による本願を堅く信じることであり、信為本に立った念仏であるということになる。ここに親鸞の念仏の内的構造の特色が考えられる。

では次に、このように呼びかけ、応答させようとする阿弥陀仏の存在は、どこかキリスト教等の人格的な一神教の神に通じるような面が考えられるが、この点から考えてみたい。

彼は阿弥陀仏について、「この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたま